鯨の亡きがら

鹿児島市立鹿児島女子高等学校　三年
有木友美

波庭はるかは、鯨のような少女だった。

彼女はもっと、自分の内面について知ってほしかったのだろうか。その悠々とした姿だけで判断してほしくなかったのだろうか。今になっては何も分からない。彼女の近くにいた私でさえも、何も分からないのだ。

私が波庭はるかと出会ったのは中学生のころだ。だが、当時は関わることもなく、かろうじて名前を知っているのみだった。そして、それは私だけではない。学校中の生徒が、彼女の「名前」だけは印象に残っていたことだろう。

彼女が学校中に名前を知られることになったあの日の出来事がふと蘇る。それは、私の学年の入学式でのことだった。

私が通っていた中学は近くの地区のたくさんの小学校から生徒が集まっていて、仲の良かった子を人混みから探し出すだけでも一苦労だった。何人かいた友達もクラスが離れてしまい、人見知りな私はこれからのことが不安で仕方なかった。

辺りをキョロキョロ見ていると、近くでひそひそと話す私と同じ新入生の少女たちの声が耳に入ってきた。

「新入生挨拶するの、ナミニワさんらしいよ」

「えー、ウソでしょ、意外……頭良かったからかなあ」

「でも、新入生テストとかなかったよね。どうやって知ったんだろ、ていうかさあ、あたしあの人が喋ってんの見たこと無いわ」

「確かに、何話すんだろう」

そこまで話して、友達を見つけたのか少女たちはおーい、と言いながら後ろの方へ駆けて行った。

話題になっていたナミニワさんという人は大人しくて頭が良い人だったのだろうか。それでも、少女たちが意外だと言っていたのには違和感が残る。普通、そういう挨拶は頭のいい人がやるものじゃないのかなあ？

ぼんやり考えながら、入学式が始まるのを待った。

入学式が始まり、次々に生徒の名前が呼ばれていく。私の名前は既に呼ばれ、緊張も少し解れた。普通なら自分が呼ばれた後のこの時間は暇で仕方ないものだろう。しかし、私は違った。この後始まる新入生挨拶が待ち遠しくて堪らないのだ。

私は何とも少女漫画や青春小説に憧れを持ちやすい人間で、不思議な同級生となるとそれこそ波乱の起きそうな展開だ、と胸をときめかせていた。

私がそこから起こるストーリーの想像に耽っていると、いよいよ新入生挨拶が始まった。

「ナミニワハルカさん」と呼ばれた後に、はい、と芯の通った声で返事が聞こえた。おとなしいイメージを持っていた私は少し驚いたが、壇上に上がってきた彼女の姿をみてさらに驚いてしまった。

現れたのは、子供っぽい二つ結びと幼い顔立ちにすらっとしたモデルのような容姿の女の子だった。何ともアンバランスだが絶妙な可愛さだ。言うなれば、等身大のフランス人形といったところだろうか。

勝手に想像して判断した私が悪いが、てっきり眼鏡をかけてきっちりと前髪を分けた女の子、つまり見てわかるような優等生が出てくると思っていたのだ。

ギャップに驚いた私ももちろん目を皿にしていたが、周りの新入生から在校生までがその可憐さに圧倒されている。こんなにも人が詰め込まれた場所だというのに、会場は彼女のまばたきの音さえ聞こえてきそうな程静かだった。

演じるようにわざとらしく深呼吸をして、彼女はこう口にした。

「皆さんおはようございます。新入生挨拶をさせていただく波庭はるかです。寄せて返す波に、庭は……まあ分かりますよね。家庭科の真ん中の文字です」

何故か自己紹介を始めた彼女をびっくりしながらも緊張した面持ちでみんなが見つめている。横に一列に並んだ教師は少しそわそわし始めたが止めるわけにもいかないのだろう。予定外の事態に冷や汗を拭っているようだ。

「私は、この学校での生活を最高に楽しいものにしたいと思います。でも、遊ぶだけじゃありません。行事や勉強にも真剣に取り組み、自分を高めていきたいと思います」

初めのインパクトが大きすぎただけに、彼女の真剣な言葉を聞いた教師たちは、ほっと胸を撫で下ろしたように見えた。

しかし、彼女はまた、何か企む小さな子供のように満面の笑みで口を開いた。

「私は、皆さんの女神になります。完璧で、清純で、皆さんを守る強さのある人間になります。だから、私から目を離さないでください」

また暴走し始めた彼女の喋りに私たちは振り回されているが、堂々と話すその姿は既に女神っぽいな、と私は感じていた。

「では、これをもちまして新入生挨拶とさせていただきます」

風が吹いただけで折れてしまいそうなしなやかな腕で、彼女はマイクを置いた。そのなめらかで自然かつ美しい動作に、誰も彼も目を惹かれていた。颯爽と壇上から去っていく彼女を目で追うも、どこのクラスかは分からなかった。

その一件からだいぶ時間も経ち、波庭はるかの噂をする人もいなくなった。私は、違うクラスだったこともあり、見かけることも少なく、会話で出すことも無かった。

ついこの間まで暑くて仕方がなかったというのに、夜から朝にかけては肌寒く、こんなに一気に季節が変わるなんて、

と思いながら過ごしていた。
学校では、文化祭を二週間後に控えており、残って作業をしているクラスも多くなってきた。私も、クラスの展示作品の手伝いに黙々と取り組んでいた。友人は漫画みたいな文化祭に憧れていたのに、と文句を言いながら画用紙を手際よく切り抜いている。
確かに私も、文化祭といえばドラマや漫画のような喫茶店やカフェなどの出店をクラスで切り盛りする、というのを想像していたが、これはこれで、私は好きだ。地味な作業は、無になれる感じがして、落ち着く。
それに、いつもは笑い声が多くてうるさいうちのクラスも、残っての作業は疲れてくるらしく、黙々と作業を続けていた。ハサミの音や、せわしない足音だけがしんとした教室に響いていた。
その時、静けさを破るように誰かの歌声が聞こえてきた。透き通った声は、少し眠気を感じていた私のぼんやりとした頭をくぐり抜けるように気持ちのいいものだった。クラスの皆が顔を見合わせていると、隣にいた友人たちが口を開いた。
「文化祭で歌うって言ってた子かな？」
「そういえば、それ波庭さんってだれか話してたよ、ほら、あの入学式でスピーチしてた子」
あんな綺麗な見た目をして、歌も歌えるなんて、欠点なんてないんじゃないかと思う。私が知らないだけかもしれないけれど。

そして、いよいよ文化祭当日。全員で残って作業した甲斐あって、展示作品もいい出来になった。展示されているものは授業で作った美術作品や書道の作品といえども、周りを画用紙で作った動物や童話のキャラクターで飾りつけて、かわいらしくなっている。
「何とか間に合ってよかったね」
「うん、最初は地味な文化祭だなって思ってたけど、こうしてみるといいね」
そう友人と話していると、生徒は全員体育館に集まってください、とのアナウンスが流れた。

他学年の劇などが一通り行われた後、自由発表が始まった。歌はもちろん、ノリのいい男子が漫才を披露したりと、毎年出場者は様々だが文化祭の中でも毎年注目されているという。
確か、友人が波庭さんは一番手らしいよ、と言っていた気がする。私は、あの時の綺麗な歌声がまた聞けるんだ、と思ってそわそわしていた。
「次は、波庭はるかさんでパライナです」
「パライナ」は、今人気のバンドが出した最新のヒット曲だ。朝見たニュースで特集されていた今月の人気曲ランキングにも、一位として紹介されていた。ざわざわ、と話し声が広がったが、ステージに彼女が立ったのを見て、すぐに静かになった。
少し曲調が激しく、テンポも速い曲なのに、波庭さんはか

ろやかに「パライナ」を歌い上げた。その姿はとても楽しそうで、彼女が本当に歌うことが好きなのだと伝わってきた。たった五分間ほどのステージだったが、その凛とした歌声は、文化祭が終わってからもしばらく、私の頭を離れなかった。

それは皆も同じだったようで、その後、文化祭での歌により、また波庭はるかについての話題がクラスで盛り上がっていた。

先輩たちの中でファンクラブまで出来たらしく、友人たちがすごいよね、としきりにそのことについて噂していた。

中学生の波庭はるかについての記憶はこのくらいである。とうとう卒業するまでクラスも同じにならず、文化祭で歌ったのは一年の時だけだった。ファンクラブの先輩たちはかなり落ち込んでいたが、彼女自身どうしてステージに立つことが無かったのか、私は友人たちの噂ぐらいからしか情報を得られないから、理由を知ることは無かった。

私は中学を卒業し、二年次から自分の学びたい分野に進めるという私立の高校に通うことになった。一年次で様々な分野を体験して選ぶことのできる制度は、開校当時とても話題になったらしい。今でも結構人気のある学校で、同じ中学から行く人も多かったと聞いている。一回でも話したことのある人が同じクラスにいれば心強いなあ、と思いながら入学式の会場前にあるクラスの名簿が書かれたパネルを見に行った。

すると、波庭はるか、という名前があることに気付いた。同じ学校に波庭さんも合格したのか、と驚いたけど、二年次で選ぶ分野の中に、確か音楽コースがあったから、そこに進みたいのかな、となんとなく納得した。

この高校でも、彼女なら中学の時のようにスピーチなんてしなくても一躍有名になるんだろうな、とぼんやりと思った。

教室に入り、自分の席を確認した。すると、偶然右隣の席には波庭さんが座っていた。つい驚いてしまって彼女のほうをじっと見た。

「あなた、名前なんて言うの」

「あ、六原めぐむ、だよ。よろしくね」

そうか、同じクラスじゃなかったし、彼女が目立ちもしなかった私の名前を知るわけもない。

「私は波庭はるか。よろしく」

「波庭さんのこと、私知ってるの。中学校の文化祭で、歌ってたよね」

それを聞いて、彼女は一瞬、なぜか困ったような顔をしてから、

「同じ学校だったのね、ちょっと安心した。良ければ、仲良くしてね」

と言った。なんだか憧れの芸能人と話したみたいに、喜びを隠せなかったが、それを見て彼女はくす、と笑ってさっきの表情はどこかへと消えていた。急に文化祭の時の話なんか

してしまって、気を悪くしたかな、と思ったけど彼女が笑ってくれたから少し安心した。

私の予想とは裏腹に、波庭さんはそこまで有名人になることはなく、同じクラスのミーハーな感じの女子がアイドルみたいですごくかわいい！　と彼女のビジュアルに感激していたのを見たくらいだ。

私と波庭さんは入学式の日から休み時間にもよく話すようになり、軽音楽部に一緒に入ることになった。

文化祭で彼女が歌った曲のグループはもちろん、最近気になるバンドを教え合ううちに、入部してみようよ、と誘われた。彼女はもちろんボーカルを目指していて、私はというと幼少期に習っていたピアノくらいは頑張れば上達できるかな、と思っていた。

入部した時には、すでに先輩たちが一つのバンドを組んでいて、それを見よう見まねで私と波庭さんは練習を重ねた。

初めはかなりひどい出来で、何より波庭さんのプロ顔負けの歌に私の技術が追いつくまでに時間がかかってしまった。それでも彼女は、私にテンポを合わせてくれたり、息抜きに付き合ってくれたりした。

お互い、先輩が卒業した後の文化祭では、ステージを成功させられるように頑張ろうね、と気合いを入れて毎日練習に励んだ。

クジラが悠々と泳いでいる夢を見た。青い海で、波を立たせることも無く、ゆったりと進んでいた。

その目は、水面に映った太陽の光を反射して、輝いていた。

「すっごい緊張する、胃が痛い、失敗したらどうしよう」

「あんなに練習したんだから、怖がる必要なんてないよ、めぐむ、自信もって」

時が過ぎるのは早く、後輩にも少しずつ技術を教えられるようになってきた頃、私たちが目指して頑張ってきた文化祭での演奏が迫ってきていた。

一緒に入部してきた同学年のメンバーもそれぞれ楽器の技術を磨いて、毎日セッションが出来るほどになっている。

部員同士の仲も深まり、この頃には下の名前で呼び合うようになった。

私は、いくら練習してもはるかの技術に至らないと思ってしまうから、いつも叱られているが、前よりは自信がついてきた、と思う。目標にしていたとはいえ、初めは自分が波庭さんと一緒にステージに立つなんて、と思っていたから。何より、呼び捨てで呼び合うなんて、中学生の頃の私は想像もしていないんだろうな、と考えて、はるかの顔を見るとが、ん、ば、ろ、う、と口を動かして見せた。

「『アイル』を演奏するのは軽音楽部のバンドです」

少し、足が震えている。失敗するのが怖いけど、それよりも、嬉しさが込み上げてきた。イントロを、ゆっくりと弾き

始めた。

結果、私たちのステージは大成功だった。皆彼女の歌声にはもちろん、演奏に聴き入っていたのだ。演奏し始めは怖いほど静かで心配になったが、中盤に差し掛かってきた頃、生徒たちが手拍子をしてくれて、楽しんでくれているんだ、と嬉しいような、照れくさいような気持ちが込み上げてきた。

私の斜め前でのびのびと歌うはるかの背中しか見えなかったが、きっと笑顔で歌っているんだろうとその声色から読み取ることができた。

また、このステージをきっかけに軽音楽部には体験入部をしたいと申し出る一年生が部室に大勢押しかけてきて、それはそれは大変だった。

だけど、文化祭が終わってからというもの、すっかりはるかは部室に来なくなってしまった。大勢押しかけてきた一年生の中には波庭さんいないんですか、とがっくりして帰っていく子も少なくなかった。

部活では仲良くしていたものの、私と彼女は違う科に進んだため、話すことがほとんどなくなってしまった。それとなくメッセージで連絡を取る際に聞いてみたが、誤魔化されることがほとんどだった。

この時期は、早くも三年での進路選択に向けてアンケートや適性診断などのイベントが盛りだくさんだ。それもあって、悩んでいるのかと思いあまり触れないようにした。

クジラは、前と違って何かを探すように泳いでいた。悲しげな声を出している。仲間の声が聞こえなくなってしまったみたいだ。必死に声を上げるけれど、気付いて欲しいわけでもないようだ。

ずっと、何かを探している。

大学生になった私は、そんないつかの出来事を思い出していた。

だって、あれは正真正銘、あの波庭はるかじゃないか。

童顔のフランス人形は、中学生の時、壇上に立ったまんまのツインテールで、全身フリルやらピンクのリボンで飾られた衣装を身に着けて、同じような色違いの服を着た同世代くらいの女の子たちと踊っていた。

こんな寒い、十二月の夕暮れに。

「愛してるって言いたいよ、今この瞬間にときめいて～」

あまりにもベタすぎるアイドルソングを、彼女は一生懸命歌って、踊っていた。

私は驚きももちろん感じていたが、何より彼女が学生時代に見たあの笑顔でアピールする姿に、何だか、嬉しくなっていた。

私は、何となく、これが、彼女が本当にやりたかったことなんだと思った。彼女の進んだ道も知らなかった私が思うの

もおかしいけど、そんな気がする。曲が終わり、ありがとうございました、と元気な声で言った。ほかのメンバーはやり切った、というような笑顔だったが、彼女だけは、少し暗い顔をしていて、いつか見せた困ったような顔を思い出した。

メンバーの一人が今日はありがとうね！　と言いながら舞台の下に降りてきた。それに続いて彼女も降りてきたのを見て私は逃げるように帰ってしまった。

文化祭以降ほとんど顔を合わせて話すことが無かったからか、自信がなかった。彼女が私にどんな反応をするのかが分からなくて、少し怖かった。

クジラは、やっと探し物が見つかって、また、悠々と泳いでいた。でも、まだ、悲しい声が聞こえる。声が伝わらないままなのが、悲しいのか、私には分からない。理由を考えようとした途端に、夢から覚めてしまうのだ。

私は、その夢を、悲しみの中にいるクジラのことを覚えていられないのだ。

また、アイドルをしている所でもいいから元気な姿を見たいと思っていた矢先、ポストに一枚、はがきが入っていた。

はるかが亡くなった、と書かれていた。葬式の日時まで書いてある。どうして、あんなに笑顔で踊っていたのに、私は、へたり、としゃがみ込んで、しばらく何も手につかなかった。

悲しい気持ちより、本当に亡くなったのか、という気持ちが大きいまま葬式会場に向かった。

棺の中には、冷たい、只のフランス人形がそこにいた。フリフリのかわいい服も、制服も着ていない彼女は命を亡くしたというより命を吹き込まれる前のような感覚を覚えた。

だからか、涙がどうも出ないのだ。

冷たくて、遠い存在に、出会ったころに逆戻りしたみたいで懐かしいなんて思ってしまった。

数日後、ＳＮＳで自殺したアカウントとして流れてきたものを目にした。そこには、暗い内容だが、暗喩のような詩が書かれていた。

捕獲されたクジラは、人間のスピーチを真似て、訴える。
でも、それを人間は聞き取ることができない。
人間って酷いのね、ってそれを聞いて皆言うでしょう。
だけどね、本当に酷いのは、私なの。
みんなに、ちゃんと辛いって言えない私だ。
悠々と泳いでいるように思わせる、私なの。

途中からクジラではなく、「私」の話になっている。
どういうこと？　この人は自分をクジラに見立てていたのかな。様々な憶測が飛び交っていたが、そんなことより、私はこの詩が波庭はるかによって書かれたものだと確信した。

きっと私しか分からない、ように書いたのだろうか。
だってこれは、はるかが私に聞かせた、夢の話に似ている。

クジラは、陸に上がって、皆に聞こえるように歌を歌った。人間にも、仲間にも届くように。でも、しばらくして、力尽きてしまった。自分の重さに耐えられなくなってしまったのだ。

クジラの希望は、やりたかったことは、クジラの大切なものを傷つけてしまうと気付いた。やり切った後に、その罪に気付いてしまった。

クジラの亡骸は、今も海を漂っている。ただの骨は、皆気付きはしない。

それで、良かったのだ。